

1月18日に皇居で開催された「歌会始の儀」（お題は「窓」）で、県人としては13年ぶりに入選した、青森市在住の高橋圭子さんの詠んだ「斜陽館に少しゆがんだ窓ガラス津島修治も見てゐたはずの」も披露された。

津島修治とは作家太宰治の事であり、「斜陽館」とは父津島源右衛門が金木村（現五所川原市金木町）に建てた生家を指す事は、説明を要しないだろう。「少しゆがんだ窓ガラス」は斜陽館に見学にいけば見る事ができる。

太宰の生家は屋号を「源〓ヤマゲン」と言い、明治期に木造村の松木家から養子に入った父源右衛門の当主時代に、県内屈指の大富豪となったことはよく知られている。多額納税者として源右衛門は貴族院議員を約3年務めた。源右衛門以前の津島家当主は惣助を名乗っていたが、経済力はそれ程ではなかったというのが、従来の説であった。

昨年末に、太宰研究の第一人者と言って良い東京大学大学院教授の安藤宏氏が『太宰治論』を東大出版会から上梓された。40年間に及ぶ研究成果をまとめた1200頁を超える大著である。御著書では、太宰の先祖について新しい説を唱えられている。小生もそのお手伝いをさせて頂いたので、この本のPRも兼ねて少し紹介したい。

安藤氏は、研究の過程で、幕末から明治初期にかけての津島家関係の古文書を手入していた。これは斜陽館が人手に渡る前に流出した史料の様で、文化〓万延年間（1804〓60）にかけて津島家が土地を手にした事がわかる証書類である。

その中に1844（天保15）年の「源 京御買物仕切目録」と書かれた史料があり、翻刻をさせて頂いた。この目録から「源」の屋号は、父源右衛門の代から使用されたと言われて来たが、天保年間に既に名

乗っていた事が分かったのである。

末尾には「戎屋喜兵衛〓对馬屋宗助殿」とあって、戎屋がこの年、宗（惣）助に納めた品物の内容もわかり、仕入高は約20両で、それ程大きな金額ではないが、太宰の生家がこの頃、既に小商いをしていた事が判明したのである。惣助は太宰の曾祖父にあたりそうである。

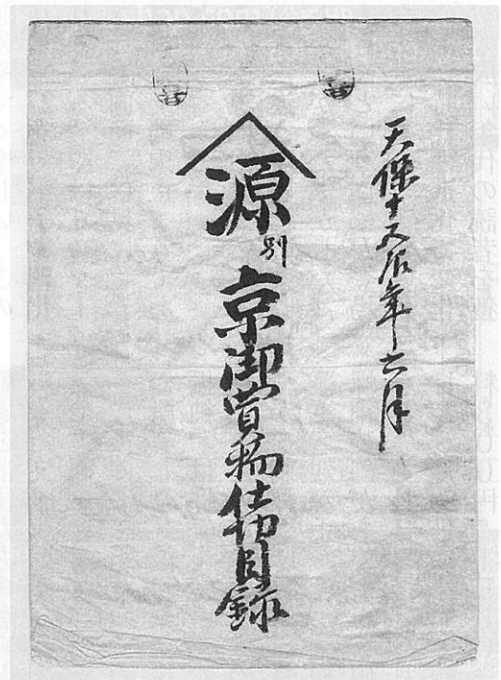
太宰の先祖の謎を探る

福井 敏隆

（弘前市文化財 審議委員長）

もう一つ重要なことも新たに分かった。それは、弘前市立弘前図書館所蔵の1750（寛延3）年の「分限帳」（弘前藩士の職員録）という史料に、「金木組代官手代」として对馬源兵衛の名前があり、1770（明和7）年に源右衛門と改名をしたという記載があったことである。「手代」は代官を助ける村役人で、庄屋を務める豪

「源 京御買物仕切目録」の表紙と末尾の部分〓安藤宏氏提供



農クラスの百姓である。对馬源右衛門は、弘前藩の記録である「国日記」（弘前図書館蔵）によれば、1758（宝暦8）年に荒関又十郎の後任として手代になった。30年ほど務めたようである。この源右衛門と惣助がどう繋がるのかは不明だが、天保年間の「源〓对馬惣助」に先行する「源〓对馬源右衛門」が存在していたようである。